

# 学生による授業評価

——教師教育の一例——

林 陸 雄

## 目 次

1. はじめに
2. 学生のニーズ
  - 1) 本学の新入学生の目的意識
  - 2) 大学生活における満足度
3. 「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の授業内容
4. 学生による授業の評価
  - 1) 望ましい教師像の達成度について
  - 2) 教授法について
  - 3) 学級通信『教科外教育ウイクリー』について
5. 今後の課題
6. さいごに

## 資 料

### はじめに

1991年に大学設置基準が改訂され、その第2条で「教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うこと」が努力義務として規定された。一方一般教育学会では、それに先立つ1985年度に課題研究として「Faculty Developmentの研究」を指定し、その研究活動を進展させてきた。そこで言う Faculty Development とは、「教授団の個人的・組織的能力開発をめざす活動」を意味し、「これから開発すべき大学の自己評価、大学教育研究、

大学教員研修等の活動を含む」<sup>1)</sup>ものにとらえている。以来、年をおって研究成果が報告され、各大学における実施例も紹介されてきた。それらを概観するとFD活動に対する見解、FD活動の展開、学生による授業評価、FDと授業評価の関連、学生による授業評価とFDの関連などであった。その中のICUでの実施例<sup>2)</sup>をみると、教員が自発的に日常の教育活動を意味あらしめるために、早くから多岐にわたって自己点検をおこなっている。特に焦点となっているのは、教育活動、学生指導、大学全般を対象にした在学生・教職員・卒業生による相互評価であり、設置基準で規定する自己点検・評価の好例といえる。

さて、自己点検・評価の対象として、具体的には何が求められているのであろうか。1991年2月に出された大学審議会の答申「大学教育の改善について」の別紙に「大学の自己点検・評価項目」が例示されている。教育理念・目標等、教育活動、研究活動、教員組織、施設設備、国際交流、社会との連携、管理運営・財政、自己評価体制の9項目であり、それをみる限りでは大学の運営・教育の全般にわたっている。

この大学設置基準の大綱化を受けて、本学でも各学部ごとの自己評価委員会と、全学の自己評価委員会を93年度に設置した。全学の自己評価委員会は年度内の教育研究事業を点検し、『各種委員会・事務所管「年間活動報告書」』ならびに『桃山学院大学 研究活動報告書』としてまとめている。前者は各種委員会ならびに事務所管ごとの活動内容を総点検したものである。後者の内容は、教員の個人別研究活動、学内学会における研究活動、総合研究所における研究活動、教育研究所における研究活動、各種の研究助成制度による研究活動の5項目にわたる研究業績一覧である。これらは、大項目の一つである「研究活動」についての点検・評価に該当する。しかし、大学教育の改善を意図する点検であるならば、教育活動についての点検と評価も欠かせないことになろう。

そこで大学設置基準の例示から「教育活動」の下位項目をみると、学生の受け入れ、学生生活への配慮、カリキュラムの編成、教育指導の在り方、教

授方法の工夫・改善，成績評価・単位認定，卒業生の進路状況等とある。それらの内のいくつかの項目については，前者の『各種委員会・事務所管「年間活動報告書」』がまとめている。

「教授方法の工夫・研究のための取り組み」，「教員の教育活動に対する評価の工夫（学生による授業評価等）」に関しては，これまでに様々な試みがなされてきた。例えば，授業形態の工夫例として総合講座がある。担当者がテーマを設定し，それをいくつかの下位テーマに分けて，その分野の研究者をゲスト講師として招き授業をコーディネートするものであり，一般教育科目の科目Ⅲとして早くに設置・実施されてきた。その授業内容を単行本にまとめたこともある。94年度の一例として，「南島文化論」の『オリエント幻想の中の沖縄』<sup>3)</sup>と「学問を創る—詩と真実」の『学問の中の私』<sup>4)</sup>がある。さらに，各学部自己評価委員会が卒業生に対して「在学中の教育に対するアンケート」を94年度に実施し，その結果を分析報告している。95年度前期には，一般教育科目に対する在学生対象のアンケートも実施され，文学部はその結果について前期の研修教授会において報告し，対応策について審議した。その他個々の教員においても，授業方法の工夫が種々なされているが，組織的に相互交流し公開するには至っていない。したがって，この点について，どのように具体化していくかが，今後の課題として残されていよう。

そこで本稿では，筆者の担当する科目の中から，学生による授業評価の実施例を紹介したい。

## 2. 学生のニーズ

学生に授業を評価させることについては，賛否が分かれるところである。反対の最大の理由は，評価の妥当性についてである。特に，大学教員からみた学生の授業に対する態度については，おおいに疑問と不満を抱く要素が多いからである。例えば，出席率の悪さ，私語，居眠り，ノートを満足にとれない等々である。このような学生が授業を客観的・公正に評価しえるのか，

という主張がある。

しかし一方、学生が意欲的に参加し学習する授業場면을教師が提供してきたのか、という反論もある。そんな学生に誰がした、というのである。現代の学校教育があげて「指示待ち人間」「自我拡散型人間」を造ってきた結果という主張なのである。

この両者が主張する現象は事実として、いま目前にある。したがってその現実にとって、具体的な解決に取り組むことこそが肝要であろう。そこで、まず「教育とは」の原点に返って、問題を整理することから始めたい。

授業は教師・教材・学習者の三要素によって構成され、その三者の相互作用によって授業は成立する。その各授業を有効なものとするには、Plan・Do・Seeの作業過程は欠かせない。その第1段階のPlanにおいて、学習者についての実態を把握し考慮した授業内容の組み立てをおこなっているのかどうか。第2段階のDoにおいて、教授法の工夫がなされているのかどうか。講義形式のみで終始していないか。第3段階のSeeで、自己点検ならびに学生からのフィードバックを活用しているかどうか、といった点がチェックポイントとなろう。

そこでまず、現代の学生は大学に対してどの程度満足しているのかについて、概観してみたい。

総理府青少年対策本部は1991年に大学・大学院生を対象に調査（回答者は145人）を実施し、『第5回青少年の連帯感などに関する調査報告書』としてまとめている。その第3章「学校・職業」で、「学校への満足度」を取り上げている。それによれば、「満足である」32.4%、「まあ満足である」51.0%と満足感を抱いている学生が大多数を占めている。しかし、「やや不満である」13.1%、「不満である」3.4%と答えた者も16.5%いた。その「不満内容」をみると、「授業のこと」54.2%、「施設のこと」29.2%、「先生のこと」20.8%、「友人のこと」12.5%、「クラブやサークルのこと」8.3%、「規則のこと」4.2%、「この中にはない」16.7%となっている。狭義の教育活動とし

## 学生による授業評価

てみた場合、「授業のこと」「先生のこと」に対する不満がその中心となっているようである。さらに、「教えてもらいたい先生」のタイプをみると、「接触型」40.7%、「授業重視型」39.3%、「世話型」19.3%であった。これらのことから、現実の授業や教師に満足できず、なんらかの改善を求めている学生達の存在がうかがえる。

この学生達のニーズに応える授業を創り出していけないかぎり、前述の授業風景は変わらないのではなかろうか。

次に、本学の学生達は大学に何を求めているのかについて、概観したい。

### 1) 本学の新入学生の目的意識

それでは本学の学生の場合は、いかなる意識をもって入学し、何を志向しているのだろうか。

本学の学務課は「新入生実態調査アンケート」を例年実施している。1990年度（回答者1555名）と1994年度（回答者1618名）の報告書から、新入学生の目的意識についてみてみよう。

まず、大学生活の目的をみると、次のような結果であった。

	1990年度	1994年度
学問研究を通じて真理を探究すること	3.5%	2.2%
専門的知識・高度な技術を修得すること	19.9%	19.4%
豊かな教養を身につけ人格を陶冶すること	31.1%	32.1%
資格をとったり将来の有利な就職を目指すこと	17.9%	18.0%
「大学卒」の学歴が欲しいため	2.5%	1.4%
課外活動を自由にすること	2.4%	3.0%
学生生活を通じて青春をエンジョイすること	15.2%	18.3%
真の友人を得ること	3.8%	3.2%
とくに目的を意識していない	3.5%	2.3%
無回答	0.1%	0.1%

その第1位が「豊かな教養の獲得と人格の陶冶」31.1%，32.1%。第2位が「専門的知識・高度な技術の修得」19.9%，19.4%。第3位が「資格をとったり将来の有利な就職を目指すこと」17.9%，18.0%であり，その3項目で7割を占める結果となった。「学問研究を通じて真理を探究すること」についての関心は極めて低いものの，「学生生活を通じて青春をエンジョイすること」との回答は15.2%，18.3%と抑制的であり，新入学生の多くが意識的には大学教育の知的側面に熱い期待を抱いて入学したといえる。

一方，「現在の一番の関心ごと」については，次のように回答している。

	1990年度	1994年度
学問研究	9.8%	10.6%
クラブ・サークル活動（文化）	12.0%	11.2%
クラブ・サークル活動（体育）	25.8%	33.6%
政治活動	1.4%	0.8%
社会的諸問題	9.1%	4.8%
芸術・演芸	8.3%	10.0%
卒業後の進路	18.8%	14.9%
金もうけ（アルバイト・ギャンブルを含む）	11.7%	9.8%
異性・セックス	2.8%	4.1%
無回答	0.3%	0.2%

学生生活に対する本音の部分が，この回答にはよく現れている。「クラブ・サークル活動」「芸術・演芸」に関心を抱く者が46.1%，54.8%と主流を占めた。それに比べて「学問研究」「政治活動」「社会的諸問題」「卒業後の進路」といった大学生活での知的な側面や授業と関わる面については，39.1%，31.1%とやや少なかった。しかも，この5年間で学生の志向が知的な面から活動的な面へとシフトしていることがうかがえる。

それでは，入学時に抱いた目的意識が大学生活の中でどれほど持続し達成

しえているのかを、大学生活での満足度としてみてみよう。

## 2) 大学生活における満足度

「学生が大学生活についてどの程度満足しているか」の調査として、リクルートによるものがある。大学4年生を対象とした大学生活についての満足度調査である。その調査では大学教育をサービスと考え、消費者である大学生の使用感や居心地を“満足”という視点でとらえている<sup>5)</sup>。

まず、「学生生活で力を入れたこと」は「サークル活動・クラブ」が49.1%とトップを占めている。それに比べて「大学の授業」は12.3%、「ゼミや卒業研究」にいたっては1.8%にすぎない。入学時に抱いた知的目標とは大きくかけはなれてしまっているのである。“出席率が悪い”との教師の嘆きを裏付ける結果である。それでは、この変化は何によってもたらされたのであろうか。当人の目的意識の希薄さ、達成意欲の低さなどと、学生の側へのみ原因帰属させることができるのであろうか。大学側、教員側への原因帰属は成立しないのであろうか。その点について検証するべく、リクルートの調査結果を今少し、追ってみよう。

それによれば大項目のうちの「学生生活に対する」個人の満足度は1.20、大学別の満足度の平均値が58.7、226校中の満足度の順位は39位であった。「大学の点数評価」でも満足度が75.63、満足値が58.5、順位が43であり、他の大学との比較でも上位にランクしていた。

中項目のうち教育・授業に関連するものをみると、「大学で受けた授業内容全般」に対する満足度が0.37、満足値が57.7、順位は46であった。次いで「教授や助教授・講師など」に対する満足度が0.44、満足値が53.5、順位は68であった。

この教育・授業について小項目レベルでの回答結果について、詳しく見てみよう。

まず授業内容に対する満足度について、「大学の点数評価」43位、「大学で受けた授業内容全般」46位と比べると、「おもしろい授業が受けられる」2

位,「新しいテーマの授業が受けられる」9位,「資格取得に役立つ勉強ができる」16位,「幅広い知識を身につける」17位が上位を占め,「専門的な知識を身につける」78位への不満足分をカバーしている。ところで,「おもしろい授業」についての評価は高いのだが,それは何を意味するのであろうか。内容に興味をもてる,授業展開の方法・技術がおもしろい,雰囲気がおもしろいなどが多様に想定され,そのイメージが明確でない。教師と学生では,そのおもしろさの意味が異なるであろう。「劇場的授業」「自動車学校的授業」といった分類があるようだが,学生の興味を喚起する授業を組み立てるには,学生のニーズ内容を明確に把握する作業が必要と言える。

教授法については,中項目の「教授や助教授・講師など」の68位と比較してみると,「コンピュータ・ワープロを自由に使うことができる」「AV機器などを用いた授業が受けられる」14位,「教授陣が授業のとりくみに熱心である」44位が上位をしめている。一方「少人数・ゼミ形式の授業が受けられる」は72位と低かった。30人未満編成の「専門演習」「論文指導・作法」「語学」の科目が用意されているのに,この不満度が高いのはなぜだろうか。「実習・実験を豊富に取り入れている」も150位と低く,その満足度は $-0.35$ と不満の方にシフトしている。前出の高位の項目がこの低位の授業への不満足分をどこまでカバーできているかは,慎重に分析する必要がある。

履修形態としては,「専門分野以外の授業も受けられる」5位,「カリキュラム選択が自由にできる」7位,ことに魅力があるようだ。入学時の学部選択やコース選択が,各自の問題意識・人生設計が明確に定まらない時点での選択であったとするなら,その修正を柔軟にしうるシステムは高く評価されるであろう。

ところで,入学時の期待が満足度と大きく乖離している現実もある。期待度と満足度との比較から,授業内容と教授法に関して,もう少し詳しく検討したい。入学時に抱いた期待度(%)と4年生時の満足度(%)を比較すると次のようになる。



## 学生による授業評価

### 授業内容

2)幅広い知識を身につける	期待度98.2	満足度66.6	不満足度15.8
3)専門的な知識を身につける	期待度98.2	満足度57.9	不満足度15.8
4)資格取得に役立つ勉強ができる	期待度94.7	満足度36.9	不満足度21.0
5)時代に即した新しい分野の勉強ができる	期待度91.2	満足度40.3	不満足度28.1
11)おもしろい授業が受けられる	期待度98.2	満足度72.0	不満足度12.3
12)新しいテーマの授業が受けられる	期待度98.3	満足度50.8	不満足度21.1

期待度はいずれの項目に対しても高く、それを達成しえた度合いは項目によってかなりの差がみられる。おもしろい授業については突出したが、満足度が低かったのは「資格取得に役立つ勉強ができる」と「時代に即応した新しい分野の勉強ができる」の2項目であった。特に後者についての不満足度合いは28.1%も占めた。

### 教授法

7)実習・実験を豊富に取り入れている	期待度87.7	満足度10.5	不満足度33.4
10)小人数・ゼミ形式の授業が受けられる	期待度98.2	満足度61.4	不満足度12.3
14)教授陣が授業の取り組みに熱心である	期待度93.0	満足度40.3	不満足度24.6
19)AV機器などを用いた授業が受けられる	期待度96.5	満足度54.4	不満足度21.1

「実習・実験を豊富に取り入れている」授業については、文系の大学ということからか、他の項目に比べてやや低めではあったが、その満足度は10.5

と極めて低いものであった。そこに「実習・実験を取り入れた授業」への期待の強さがうかがえる。次いで低かったのが「教授陣が授業の取り組みに熱心である」との項目については、満足度が他の項目よりも低く、不満足と答えた者が24.6%を占めた。制度や設備の整備はかなり充実しており満足度も高いことから、課題として残されているのはソフト面の充実である。

具体的には、学生達は少人数のクラスで実習や実験を多く取り入れた教授法で、時代に即応した新しいテーマで、専門的で幅広い知識と教養を培い、資格取得にもつながる現実的で実際的な授業を求めているとみることができる。

### 3. 「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の授業内容

筆者が担当しているのは教職課程のうちの「教職に関する科目」である。具体的には「社会科教育法」(半期2単位)、「公民科教育法」(半期2単位)、ならびに「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」(各半期2単位)である。「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」とは、教育職員免許法が1991年に改訂されたことに伴って、同年に免許法施行規則も改訂され、新設された科目である。前者は同法第6条の表、第3欄に加えられた「特別活動に関する科目」に該当する。後者は同じく同表第5欄「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」に該当する。

免許法の改訂は教員の資質能力の向上を意図し、「学校教育の直接の担い手である教員の活動は、人間の心身の発達にかかわるものであり、幼児児童生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような教員の資質能力の向上は、その養成・採用・現職研修の各段階を通じて、総合的に図られるべきであることはもとよりであるが、まず、その最初の段階である大学での養成段階で真に教員にふさわしい人材の育成をすることが大切である」<sup>4)</sup>としている。したがって、「教員養成課程において、教科指導・生徒指導等についての基礎的・理論的内容と広い教養、そして実践的指導力の基礎を確

実に身に付けさせる……」<sup>6)</sup> ために、「特別活動に関する科目」と「生徒指導、教育相談、進路指導に関する科目」が新設されたとしている。

前者の扱う「特別活動」の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」<sup>7)</sup>と平成元年版『中学校学習指導要領』に記載されている。その内容として「学級活動」「クラブ活動」「生徒会活動」「学校行事」がある。後者は、不登校、いじめ、中途退学といった教育問題に対処しうる「生徒指導」能力を向上するために新設された科目である。したがって、その学習すべき内容も「生徒指導」「教育相談」「進路指導」と設定されている。

筆者は、現代の教育問題は教育制度、教育課程、大学受験教育体制、学歴主義社会といった諸要素を是正し限り、克服できないとみている。しかし、それにしても目の前に児童・生徒がいるのであるから、制度や社会が変わるまでは何もできないと、拱手傍観しているわけにはいかない。現実的には適応的・妥協的に対応していかざるをえない。そのなかで、問題の本質を見据え、その解決に向かって邁進しうる能力を、教員養成の段階でいかにして育成するのかを問うべきであろう。

#### 4. 学生による授業の評価

大学での教員養成段階において、教員の力量形成能力を育成するには、授業内容と教授法について日常的に点検・改善する作業を欠かせない。「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の科目では、教授法について様々な工夫を試みた。それらが適切であったのか否かの点検手段として、学生による授業評価を年度末に実施した。学生による授業評価の妥当性については、マッキーチの「授業科目（コース）内容が適切かどうかという評価は、その分野の専門家、一般には他の教師による判断が必要である」<sup>8)</sup>との指摘からみて、評価の対象

を限定してとらえる必要があろう。しかし教師の役割は、その授業科目の教育目標を設定し、具体的な学習内容を提供し、学生に学習指導し、その目標に到達させることにある。教育・学習指導の目的は学生に変化をもたらすことである。「学生に一層の学習意欲を喚起したり、好奇心を呼び起こしたり、より教養のある態度に影響を与えるというような教育目標との関連から、学生による評価はかなり有効だ」<sup>9)</sup>との検証がある。したがって、学生による授業評価を実施することは、授業の点検のみに終わらない。学生に自らが授業構成の一要素であることを自覚させ、主体的に授業に参加させる方法としても有効な方法であるといえよう。

筆者は授業に対する評価として、二つの柱をたてた。その第一は、学生からみた好ましい教師像を授業者がどの程度達成したかを測定すること。第二は用いた教授法がどの程度、学生の学習意欲を刺激したかを測定することである。

第一については、Feldman の指標を用いた。彼は、優れた授業に関係すると学生達が信じている教師の資質に関する多くの研究を検討し、「望ましい教師の資質・能力として一貫して指摘されている」指標<sup>10)</sup>を導き出した。その指標を用いて、学生に5段階評価を求めた。第二については、資料にあるような設問を用いた。この場合も、5段階評価を用いた。

受講生は150名であるが、コンスタントに出席し評価に答えた者は134名であった。内訳は2回生76.9%，3回生以上23.1%。文学部39.8%，社会学部34.6%，経済学部19.5%，経営学部6.0%であった。

受講生が教職課程を履修しようと考えた時期は、大学に入ってからが44.0%と最も多く、高校時代が38.1%，中学卒業までにと答えた者は17.9%であった。授業に出席するだけでなく、この「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の科目に「学習時間をどの程度あてたのか」との問いに、0時間と答えた者が50%強であった。30分の者がほぼ33%，1時間以上の者は15%程度にすぎなかった。その回答には正直さがうかがえる。

1) 望ましい教師像の達成度について

まず、第一のFeldmanの指標による評価結果について見てみよう。

「熱意」「親しみやすさ」といった授業に臨む態度・雰囲気については9割近くの学生が肯定的に評価している。具体的には、次のようなコメントがあった。“講義の内容はつまらないものなのに、おもしろくしようとする先生の熱意は、見習うものがある（本音）。”“熱意が十分に伝わった楽しい授業でした。”“先生の熱意はいつも感じることができました。”“楽しみな授業の1つだった。”“授業は毎回楽しかったです。”“1年間、とても楽しい授業でした。”“人間味のあるいい講義だと思います。”“先生はいつもニコニコして授業をしていたので、聞いていて気持ち良かった。そういうところを見習って、今後取り組んでゆきたい。”“高校までの学校で、先生のような先生がいてたら良かったと思った。”“先生はとても楽しい方でした。中学・高校にも、もっと先生みたいにいつも笑っている先生がいると良いと思います。”

授業の展開に関わる「興味・関心の喚起」「明快さ」についても、ほぼ8割の学生が肯定している。「興味・関心の喚起」に関わるコメントに、“この授業は、他の授業と比べ、内容も異質で良かった。”“全授業のうち、一番楽しかった授業だし、いろんな事を考えさせられました。”“授業はとてもためになり、いじめ問題なども関心が湧いた。”“私にとって貴重な時間となったと、強く感じています。テキストだけでは解決できないことをたくさん学びました。”“この一年で、予想以上の収穫があったと自分では思っている。これまで受けてきた教育の中で感じてきたことが、少しすっきりしたような気がしています。”“後期の最後の方に、いじめによる自殺があった。これは教師を目指す自分にとってショックだった。先生は何もしてやれなかったのか、学校の方は……。こういうふうに強く考えれるようになったのも、教職をとっていたからであると思った。いい授業でした。”とあった。しかし、“先生も熱心に教えてくれて、いい授業だったと思います。ただ、問題

意識は高まったが、その後の発展が余りなされてなくて、もっと実践的な事が必要になってくると思いました。”と深め方に物足りなさを感じた者もいた。

授業内容の精度に関わる「教科の知識」「準備」については、ほぼ3/4の学生が認めている。

だが、これらとは対照的に対学生との関係の質に関わる「援助」「他者の見解に対する寛容さ」について肯定的に認めた学生は5割に満たなかった。

学生達が求める「援助」とはいかなる内容のものを指すのか。授業者である筆者と学生達の間で、共通する概念が成立していないので、この項目についての判定は困難である。それゆえ、この項目が意味する内容を明確にするには、新学期早々に援助の内容と方法について学生達との間で協議・調整しておく必要がある。「他者の見解に対する寛容さ」についても、同じ事が言える。授業者としては、遅刻や途中退室、私語や居眠り、授業への関心の低さに対しては寛容であることは難しい。その原因が授業者側にあったとしても、その場面に遭遇するたびに否定的感情的を表出していると言えよう。したがって、この項目の評価基準についても、協議・調整が必要となる。

次に、これらの指標を点数化したところ、「援助」「寛容さ」を除いて、各指標とも評価4に収斂した。

#### 望ましい教師像の達成度

	きわめて 高い	かなり 高い	どちらとも 言えない	かなり 低い	きわめて 低い	肯定率	平均点
1)興味・関心の喚起	27 (20.1)	79 (59.0)	25 (18.7)	2 ( 1.5)	1 ( 0.7)	79.1	3.98
2)明解さ	37 (27.6)	68 (50.7)	24 (17.9)	5 ( 3.7)	0	78.3	4.05
3)教科の知識	42 (31.3)	60 (44.8)	32 (23.9)	0	0	76.1	4.13
4)準備	46 (34.3)	52 (38.8)	32 (23.9)	4 ( 3.0)	0	73.1	4.06
5)熱意	48 (35.8)	71 (53.0)	13 ( 9.7)	2 ( 1.5)	0	88.8	4.24

## 学生による授業評価

6)親しみやすさ	57 (42.5)	61 (45.5)	9 ( 6.7)	5 ( 3.7)	2 ( 1.5)	88.0	4.26
7)援助	20 (14.9)	44 (32.8)	59 (44.0)	9 ( 6.7)	2 ( 1.5)	47.7	3.61
8)他者の見解に対する寛容さ	18 (13.5)	39 (29.3)	71 (53.4)	5 ( 3.8)	0	42.8	3.59

### 2) 教授法についての評価

教授法についての評価結果は、次の表のごとくとなった。

まず、各教授法の概略を示しておく。

### 教授法とその評価

	きわめて 強い	かなり 強い	どちらとも 言えない	かなり 弱い	きわめて 弱い	肯定率
1)講義	15 (11.3)	56 (42.1)	54 (40.6)	8 ( 6.0)	0	53.4
2)グループ討議	23 (17.2)	52 (38.8)	44 (32.8)	3 ( 2.2)	0	56.0
3)クラス発表	18 (13.4)	65 (48.5)	38 (28.4)	10 ( 7.5)	3 ( 2.2)	61.9
4)全体討議	13 ( 9.8)	41 (30.8)	55 (41.4)	18 (13.5)	6 ( 4.5)	40.6
5)ロールプレイ	43 (32.1)	55 (41.0)	22 (16.4)	10 ( 7.5)	4 ( 3.0)	73.1
6)実習	37 (28.5)	48 (36.9)	35 (26.9)	7 ( 5.4)	3 ( 2.3)	65.4
7)VTR 視聴	40 (29.9)	55 (41.0)	31 (23.1)	5 ( 3.7)	3 ( 2.2)	70.9
8)ウイクリー	47 (35.1)	59 (44.0)	22 (16.4)	5 ( 3.7)	1 ( 0.7)	79.1
9)自己学習	6 ( 4.5)	18 (13.4)	59 (44.0)	28 (20.9)	23 (17.2)	17.9

グループ討議，クラス発表，全体討議とは一連の体験学習法である。「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の受講生は約150名である。その受講生に模擬的に学級活動を経験させ，生徒の側からみた学級活動の内容と指導方法について考えさせ，教師として指導するときの留意事項について整理させることを意図した。そのために受講生を4クラスに分け，委員長と副委員長を中心に学級活動をさせた。大阪府の教員採用試験で出題された小論文のテーマを用い，学級内で討論し意見を集約するのが課題である。クラスを小グループに分け，班長を中心に討議をし，その要約をクラスで発表し，全体で集約する。そのクラスのまとめを4クラス合同の場で発表し質疑応答する，といった一連の課題を与えた。

次の「ロールプレイ」とは役割演技法であり，ケースワークやカウンセリングの学習法として活用されている。ここでは「面接における傾聴の意義」について，その実際について体験学習させることを意図した。まず，二人が組になって，一方が相手の悩みの相談の聞き役になり，途中で役割を交替をさせた。人の話を聞くというのは，簡単なようで難しいこと。自分に都合よく，勝手な聞き方をするのではなく，相手の気持ちになって傾聴することの難しさを実感させることがねらいである。そのうえで，傾聴するためには，体系だった学習と訓練の必要性に気づかせようとした。さらに，学校での生徒指導例として，アルバイトをめぐって担任が生徒と面接する場面を設定し，代表者2人に演技してもらい，それを全員で検討することも試みた。

第3の実習とは，ゲームとして「目隠し散歩」を用いた。二人が組みとなり，一人が目をつぶり，片方が介護しながらキャンパス内を散歩するものである。介護する際の条件として言葉を用いず，スキンシップによって伝達させた。これらのねらいは，認知手段が制限された時の不自由さ，自己の無力感，他者の介護の意義と介護者への信頼感，意思伝達の手段である会話を制限された場合の不自由さ，会話機能の意義，相互信頼とコミュニケーションの重要性等々について，問題意識を抱かせることであった。そこから発展させて，仲間づくりの重要性，尊重，信頼といった概念について実際に即して



思考を深めさせること等を意図した。

第4のVTR視聴の材料としては、100歳の高校教師「うめ子先生」と、現場の教員による学校でのカウンセリングの取り組みを紹介したものを用いた。

第5のウイクリーとは『教科外教育ウイクリー』（以下、『ウイクリー』と略す）と題する学級通信である。毎回の授業で提出するコメント・カードの中から、意見内容が偏らないように選び出して、B4版の片面または両面に編集して、次の授業で配布した。

第6の自己学習とは、授業に出席する以外に、「教科外教育の研究」に関連する予習、復習、自主学習を意味する。

次に、各教授法に対する評価について整理したい。

肯定率がもっとも高かったのは、『ウイクリー』である。その理由については、次節で検討したい。

次いで高かったのがロールプレイであり、「きわめて強い」と評価したものが32.1%と、『ウイクリー』に次いで高率であった。大学での多人数の授業では、講義形式が多く実習形式の教授法が採用されにくいこともあってか、受講生にとっては新鮮に感じられたようである。社会福祉コースを履修する学生は、「社会福祉援助技術」の科目で实际的な教授法を経験しているが、その人数はそれほど多くはない。したがって、大多数の学生にとっては、面接、傾聴、援助、役割演技法といった概念なり内容については、インパクトが強かったようである。そのコメントとして、“ロールプレイングなど少し変わった内容で楽しかった。” “ロール・プレイの授業がもっとしたかったです。参考になるビデオとか見れたのがとっても良かったです（講義だけでなく、より分かりやすかったから）。”

インパクトの強さという面からは、VTR視聴も肯定率が高かったが、教材の選択も大きくかかわっているようだ。“Videoなども大変参考になって良かった。” “VTRなど多様な教材を使用することにより、授業に興味湧いて良かった。” 教材の自主製作も今後は検討すべきであろうが、今のところ

ろその体制を組めないのが現状である。

同じく実習についても、教材の検討が必要である。講義内容と関連する、予想外な教材や学習経験が興味を湧かさせたようである。

学級活動については、グループ討議とクラス発表までは、各クラスともかなり楽しみながら熱中し集中しえたようである。“教師になるにせよ何にせよ、楽しかったです。もう少し小クラスの討論があれば良かったのでは？ウィークリーをネタにしてもいいと思います。カチンとくるのもあったので。”

“グループ討論など、班毎で何かを行うことが多かったおかげで、他学部、他学年の友達がたくさんできたのが、この講義をとって一番良かったと思う点です。” “この授業は、多くの人の意見が知れて良かったと思う。みんなすばらしい意見を持っているんだな……。” “クラス活動が計画より少なかったのが、非常に残念だった。” とのコメントがあった。

しかし、大学と大学の授業に対する固定観念があって、学級活動に主体的に参加しにくい受講生もかなりいた。受け身でいたい、傍観者でいたいといった利己的な気持ちも働いて、こちらが期待したようには活動しなかった受講生もいた。さらに、教師であるために、全員にリーダーの役割を担わせ、その経験から学習を深めさせたいと考えていたので、委員長と副委員長、班長の選出方法は自由にさせた。そのこともあって、クラスによって、学級活動の展開に個性がみられた。その個性が、プラスに展開しがたかったために、全体討議がうまくすすまず、肯定率が低く現れた。したがって、これは具体的な指導のまずさを反映した結果といえる。それゆえ厳密な点検と今後の改善策を講じ、克服すべき筆者自身の課題でもある。

教授法としては、講義法が低率であった。これは筆者の Plan と Do に点検すべき課題を多く内包することを意味している。受講生のコメントに、“ウィークリーにも時々書かれていたけど、授業中のことで、講義がつまらないというのは、ロールプレイングやVTRを見たときとのギャップが激しすぎるからだと思う。それは仕方ないから気にしなくても良いと思います。” とあった。心情的には嬉しくなるコメントではあるが、それに甘んじたので

は、責務を果たせない。講義法による授業について、精密に分析する方法を検討しなければならない。

全体としては、“他の講義に比べ、特色ある授業で、とても楽しく受けることができた。来年以降も、是非良い授業をしてください。”“この教科外の授業では、受身的授業よりも、特別活動のための授業なので、体験的学習をもっとしてほしかった。例えば、ロールプレイングや、討論などは本当に役に立った。”“先生の講義は、大学の講義らしくない講義で楽しかった。具体的にいえば、まず眠くなりにくい、聞きたいと思う。また、実行してみたいと思う、などがありました。”“先生はただの講義のみでなく、色々やってくれたので良かったと思います。”“前期はクラスでの活動が多く、なかなか活気もあったけど、後期は講義が主体で、他の受講生とかかわる機会が少なかったので、後期にも様々な活動を取り入れた方がいいと思う。”といったコメントからみて、受講生が主体的に参加する形態の授業法が求められていることから、評価が高くなったと言えよう。

### 3) 学級通信『教科外教育ウイクリー』について

前節で、教授法の中でも『ウイクリー』に対する評価が突出していることをみた。受講生にとって『ウイクリー』がいかなる意味をもったのかについて、以下に検討したい。そのまえに、『ウイクリー』発行の経緯について説明しておく。

筆者は、教育職員免許法が改訂される前年の1990年度に本学に就任し、旧法下の「社会科教育法」(通年4単位)を担当した。その授業において『教科新聞』を発行した。その意図は、教員養成の課題である「教員としての力量形成能力」の育成に資することにあった。前述のごとく、授業の構成要素の一つである学習者が、各自の課題意識と問題意識をもって主体的・計画的に授業に参加するのでなければ、その学習効果は高まらない。それゆえ毎回の授業のPlanningの段階で、学習者の実態を把握し考慮にいれることを欠

くことはできない。しかし現実には、大人数の授業では個々の受講生の課題意識や問題意識を把握することは困難である。受講生が何を感じ・考え・期待し・失望しているのかを捉えるために、毎授業ごとにコメントカードに授業に関する感想や意見を書かせた。そのことによって、授業の Planning が改善できた。

さらに副産物を発見した。受講生のコメントには多種多様なものが含まれていた。教員に対する主張だけではなく、受講生に対する内容のものもあった。さらには、教職課程を履修する者としての悩みや不安を語るものもあった。これらについては、受講生に還元したほうがよいと考えられた。そこで、教師と受講生間、受講生相互の間での多方向のコミュニケーションの場として、『教科新聞』を作成することにした。

『教科新聞』の具体的なねらいは、①教育現場で取り組まれている学級通信・教科通信を体験させ、実践する場合の参考にさせる。②教師と学生、学生間の相互コミュニケーションの場とする。③授業の点検・評価の場とする、ことである。その方法は、毎授業でコメント・カードに授業に関する感想や意見などを書かせる。編集は誤字・脱字などの修正にとどめ、全員のコメントを実名入りで掲載する。次回の授業の冒頭で配布する。年度末に1冊に編集しなおして、受講生に配付するというものである。その取り組みは現在も継続しているが、その詳細については他の機会にゆずりたい。

前述したように「教科外教育研究Ⅰ・Ⅱ」が取り扱う内容は、学級の仲間づくりと深く関わっている。したがって、受講生に学級通信を直接体験させる意味がより大きいと考えられる。「教科教育法」の受講生は中学社会科と高校公民科免許を取得するものであり、教職課程履修者の一部にすぎない。一方、「教科外教育研究Ⅰ・Ⅱ」は教職の必修科目であり、教職課程履修者全員が履修している。それゆえ、「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」で発行すれば、履修者全員に『学級通信』を直接経験させることができる。『教科新聞』への受講生の肯定的な反応を得て、1994年度から「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」でも学級通信『教科外教育ウイクリー』を発行することにした。

発行にともなう負担は大きい。だが、『教科新聞』については1993年度から学生が作成に参加するようになったので、少し負担が軽減された。そのこともあって、『ウイクリー』発行に踏み切ることができた。

『ウイクリー』に対する受講生による評価を、次のように整理できる。

『ウイクリー』の発行について、“僕には授業の中でウィークリーが一番楽しく、意義あることだったと思う。自分が教師になったとして考えるだけでなく、人間としていろいろな考えを知ることができ、少なくとも知的に成長できたと思う。”とのコメントが示すように、「楽しみだった」と肯定した者は68.7%であった。その理由として、「自分のコメントが載るのが楽しみだった」者が74.3%を占めた。“私が一番うれしかったのは、ウィークリーに自分の書いたコメントが載ったことです。かなりやる気が湧きました。”

“ウィークリーに僕のコメントが一度も載らなかったのが残念だった。”と自分のコメントが注目され掲載されることに喜びを示していた。全員を一度は掲載する編集方針であったが、徹底できなかった。それゆえ、最終号には授業評価の集計結果と全員のコメントを掲載した特別号を発行した。

一方、掲載されることが「嫌だった」と答えた者も15.8%おり、12.7%の者は本音を書くことを否定している。そのことと符合して“みんなの意見がどの程度本音に基づいていたのか、どうしても疑いがちになってしまう。もっとも出席して感想を書くほどの人は、皆一様に真面目なのかもしれないから、結構真実味がある、と判断していいのかもしれない。”とのコメントもみられた。だが、67.2%の者は「いつも本音を書いた」と答えている。

「他の人の意見を知ることができてよかった」とする者が93.3%を占めた。“ウィークリーは、本当にあらゆる意見で良かったです。”“この授業は、多くの人の意見が知れて良かったと思う。みんなすばらしい意見を持っているんだな……。”と他者の存在を意識し、その内実に心を傾ける関係が醸成されたと言えよう。とはいえ、そのことを否定する者もいる。「他の人の意見を知ることができてよかった」かとの問いに、2人の受講生が「かなりちが

う」と答えている。明確に否定した者が2人であったことは、ほとんどの受講生が「自分の本音を表出することはともかく、他者の意見が気になるし知りたい」と思っていることになる。完全に関係を遮断しているのではないのである。

コメントに責任をもち、積極的に他者と関わっていくには「実名を載せる」ことも検討する必要がある。しかし、その肯定率は低く、“実名は特に載せる必要はないが、せめて学年と男女の区別くらい載せてほしかった。”とのコメントがみられたが、保留する者が多数を占めた。安心して本音を語り、互いが尊重される時空を創り出すこと。それは地道な実践の積み重ねのなかで派生するのもかもしれない。まずは他者の意見を知ることを通して、「仲間意識を湧かせる機会に」してほしいのだが、その達成度は47.7%、ほぼ半数といえよう。

『ウイクリー』を通して「自分を振り返るチャンスとなった」68.7%、「自分の考えを整理する機会となった」73.1%とほぼ7割のものが認めている。『ウイクリー』が学生間の多方向コミュニケーションの時空として機能したと言えよう。それゆえ、「役にたたず無駄だ」とみる者が2.9%いるものの、「後輩のためにも継続してほしい」87.3%、「自分も教師として実践してみたい」65.7%と受け止められたのであろう。“『ウィークリー』は本当に感心するほど、毎週まとめて来て下さって良かったと思います。ただ、先生に負担がかかり過ぎて大変かなと思ったりもします。”“『ウィークリー』は大変だったと思いますが、今後も継続してほしいと思う。毎日授業が楽しかったです。”“『ウィークリー』は本当に毎週楽しみにしていました。先生の方は、編集で大変だと思いますが、これからも教師を目指す学生のために頑張ってください。”“『ウィークリー』は是非続けて下さい。”とのコメントがあった。筆者の意図としては、発行に伴う苦勞や楽しさも受講生に伝えたい。そのためには受講生をいかにして巻き込むか、発行の作業に参加させていくかが、次年度への課題といえよう。

今後の工夫として、「コメントへの担任からの意見を載せる」75.4%こと

で、教員と学生間の双方向のコミュニケーションをより深め、それを核として学生間の多方向コミュニケーションを活性化し、「自分を振り返り」「自分の意見を整理する」作業がより深まる契機となろう。誌面の工夫として「多様なコーナーをつくる」51.5%ことで、多面的な機能を持たせることもできよう。

『ウイクリー』についての評価を総合すれば、受講生自身の学級づくり、仲間づくりの契機となり、教員としての力量形成に資する試みとしては、一応の成果があったと言えよう。

## 5. 今後の課題

「教科外教育研究Ⅰ・Ⅱ」の授業を通じて、受講生各自が学習しえた程度の評価は、次のような結果となった。

授業を通じて、明らかに「教師への志望意欲が減退した」者は3.7%にとどまったが、「志望意欲が高まらなかった」者も6.7%みられ、約30%の者が意見を保留した。その内実をコメントから探ると、“今後、教職は諦めることになったが、色々な問題などに当たって、ためになったと思う。”“この講義中、失望することの方が多かったです。今の社会や教育現場そのものに対して。今の世の中の教育の中で教師になるということは、あらゆることの板挟みになることのように思いました。残念ながら、私にはそこまでの熱意や強さが足りないのだと思います。しかし、様々な問題提起のある講義で、そういう意味では物事を考えさせられ、良い機会を与えてもらえたと実感しています。”“正直言って、教師はやり甲斐のある仕事だけれども、なかなか精神的にも重労働な仕事だと思いました。残念なのは、この授業で、教職に対して志望意欲が減少したことです。自分が体罰をしたり、自分のクラスでいじめがあったら嫌だなあー、と思ってしまうからです。でも、この授業を聞くことによって、人間的には成長したように思います。きっといい「母親」にはなれる気がします。”というものであった。

それに対して志望意欲を高めたとするコメントとして、“父親が教師とい

うことで、親に勧められて教職を取り、嫌だったんですが、勉強していくうちに興味って湧くものなのですね。” “前期の授業は全くおもしろくなかった。自分の姿勢が悪いからかとも思ったが、それだけではなかったらしい。後期の授業は自分にとってかなり有意義だったと思う。それはずっと教師になりたいと思い、その中で考え続けた疑問や問題が、そのまま授業の中で取り上げられたので興味が湧いたからだ。ただ子供と接するだけではなく、（それすらもとてつもなく困難だが）教師間、保護者との関係、学校という公権力的社会の難しさ、自分という人間のたらしさ、採用試験の難しさ——もう様々な事柄が、教師になりたいという強い思いとあきらめる思いの間で、私の心を揺さぶり続ける。この授業の中で、「やっぱり大変」という思いもかなり起こったけれど、それ以上に教育の重要性を改めて思い知り、「先生になりたい！」という思いも強くなったのが大きな収穫だった。前期はおもしろくなかったので、先生にも好感が持てなかったが、後期は授業がおもしろくなるにつれて、先生への好感度も増していったから不思議なものだ。” と率直に語ってくれた者もいた。

さらに、“金曜日にバイトで塾の講師をして、いつも失敗して落ち込み、土曜日の教科外の授業を迎えていました。この1年、落ち込んで、授業を受けて、また、頑張るぞ!!と思いながらやってきました。この授業がなかったら、もうとっくにバイトなんて辞めていたかも……と思います。あと2年、頑張って勉強して、いつか教師になって、教壇に立ち、生徒達に自分の大学生活の話をしたいなあとと思います。” とのコメントもあった。

また迷いを抱く者もいた。“一年間通してというか、ある程度この授業に参加してみて、何回教師になろうか、なるまいか考えたが結局分からない。教師という看板だけで、何でもこなせると思われるのは嫌だ。僕には教師というものにプレッシャーが一番あると思う。逆にそれが宿命なのだろうか。” これらのコメントから、教師になること自体が採用人数からみても至難な現状では、あこがれや夢に駆られて教員を志望するのではなく、十分に迷い、考え、決断してほしい。そのことに役立つ授業展開を工夫しなければならな



いと考えさせられた。

87.3%の者が「教職の重要さを痛感した」。“一年間やってきて、教師というものが少しでも、分かったような気がします。一旦、教師になると、忙しい毎日を過ごすことも分かりました。”“簡潔に書くと、教師という職業は、一番簡単な仕事であるが、一番難しい職業であることを痛感した。教師の人はすごい。”“春頃は、教職の勉強って、どんなことをするのかぁ、ちょっとのぞいてやれという軽い気持ちだった。今も、絶対教師にという熱意はないけれど、様々な問題を見るにつけ、熱っぽくなる自分が生まれつつあります。これは、林マジックにかかったのでしょうか……。”“教師とは、物を教え、知識を増やさせるというだけの存在ではなく、生徒一人一人の中に「何か」を見出させるという、重要な役割を持っている。もし教師になることができたなら、生徒の心に残れるような教師になりたい。”“この科目を受講していて、まず最初に思ったのは、教師が生徒を指導するのは安易にはできないということです。生徒の抱える問題や不安を共有し、適切な指導を施す難しさを痛感しました。1年間大変興味深い講義だったと思います。”

“1年間この講義を受けて、教師という仕事の大変さを実感しました。授業の準備だけでなく、生徒1人1人のことや、その他の学校の活動について、教師という仕事は、多くの仕事を抱えているということが分かりました。1年間楽しく、（後期はあまり出れませんでした）講義を受けさせていただきました。これからも、このような楽しく、でも、教師になったときにためになるような授業をして下さい。1年間ありがとうございました。時間があれば来年からも講義をのぞきたいと思います。”とのコメントがあった。

84.2%の者が「多くの課題を見いだした」と答えている。“教科教育のほかにも、様々なことを教師はしなければいけないのだなということが、良く分かりました。”“教師になるには人間的にも立派な？というか、心の豊かな人にならなきゃだめだと思いました。また、とても難しいなあと痛感しました。”“テキストなどによる知識ももちろん大切ですが、私たち1人1人が教師になったとき、知識だけの教師になるのか、人間らしい教師になるの

か、もっと私たちは考えなければならないと思います。” “先生が「問題を抱えている子」と問題を説明されるとき、私は自分をちょっと当てはめていて、まだ問題を乗り切っていない生徒のつもりになっていることに気づき、先生になろうとする前にすることがあるなぁと最近気づきました。” と、課題を整理し、自己の内実をみつめ直す者もいた。

さらには授業内容から問題意識を抱き、“カウンセリングのことに大変興味を持ちました。いじめが多発している世の中で、日本も、必ず、カウンセラーの必要性に気づき、重要な職業となることだろうと思います。” “この授業を受けることにより、カウンセリングの勉強をしようかと思いました。詳しくそのお話を聞きたいと思いますので、今度時間を作ってください。よろしくお願いします。” と、進路方向を発展させる者もいた。

全体的には肯定的な評価となったが、検討し解決すべき課題も明らかにある。例えば授業を通じて伝えようとした教育情熱を、建前論として受け止めた者6.7%もいた。55.2%の者は肯定的に受け止めたようであるが、残りの38.1%は意見を保留している。語ることの難しさと、伝える事の難しさを実感させられる。「伝えることの難しさ」は、受講生にも実感してほしい課題でもある。人を育てるものの難しさと喜び、その意義について思考を深めてほしい、その認識を深める授業をいかに創造するのが主たる課題である。

授業に通じて「教職の重要さを痛感」しなかった者、「課題を多く見いだせ」なかった者がそれぞれ1.5%いた。それは1年間の授業が、その受講生にとって無意味なものと終わったことを意味するのであろうか。だとするならば、当人にとっても筆者にとっても不幸なことだと言わざるをえない。この問題をいかにして克服するのか、少数者からとは言え、重い課題が提起されている。筆者としては、すべての受講生に現代の教育の現実を見つめさせ、その多大で困難な教育問題に主体的に取り組む意欲と、児童・生徒達に夢を抱かせる教育実践をしてほしいと願っている。受講生各自が問題意識を深め、自らの課題を整理して、主体的意欲的に学習を進めてほしいとも願っている。

## 学生による授業評価

そのための刺激材として、この科目が作用しえたのか否かを点検し、さらなる改善に努力したいと考えている。

### さいごに

「教科外教育研究のⅠ・Ⅱ」の科目についての自己点検例を報告した。授業の構成要素である受講生による授業評価である。教員養成の今日的課題からみて、「ペーパー・ドライバー」や「デモ・シカ教師」の大量生産は許されない。入学当初に抱いた新入学生の目的意識や希望を根付かせ大木に育て上げる責務を、教職課程を担う一人として痛感している。

冬の時代を迎えた大学が様々な模索を試みるなか、大学教育におけるソフト面での改善に努力を続けるべく、授業の一端と評価例を開示した。教育活動の点検・改善に資することを願ってやまない。

### 資 料

「教科外教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の授業に関する調査（項目と結果）

Q 1 あなたの性別は

1) 男性：60 (44.8)      2) 女性：74 (55.2)

Q 2 あなたの入学年度は

1) 93年度	2) 92年度	3) 91年度
103 (76.9)	27 (20.1)	4 (3.0)

Q 3 あなたの学部は

1) Le：24 (18.0)	2) Li：29 (21.8)	3) E：26 (19.5)
4) S：46 (34.6)	5) B：8 (6.0)	

Q 4 あなたが教職課程を履修しようと思った時期は

- 1) 大学に入ってから : 59 (44.0)
- 2) 高校時代 : 51 (38.1)
- 3) 中学卒業までに : 24 (17.9)

Q 5 あなたは授業時間中の学習とは別に、この科目について平均どの程度の学習時間をあてましたか？

週当たり	教科外 I	教科外 II
0 時間	69 (51.9)	70 (53.4)
30分	44 (33.1)	43 (32.8)
1 時間	10 ( 7.5)	12 ( 9.2)
1 時間30分	5 ( 3.8)	3 ( 2.3)
2 時間	1 ( 0.8)	1 ( 0.8)
2 時間以上	4 ( 3.0)	2 ( 1.5)

Q 6 あなたは教科外 I・IIの授業にどの程度出席しましたか？

	全回	2 / 3 以上	2 / 3 以下
教科外	1	2	3
	24 (18.0)	100 (75.2)	9 ( 6.8)
教科外	1	2	3
	28 (21.5)	79 (60.8)	23 (17.7)

Q 7 次に示す授業法は、あなたの「教科外教育の研究」に対する関心をどの程度強めましたか？

	きわめて 強い	かなり 強い	どちらとも 言えない	かなり 弱い	きわめて 弱い	肯定率
1) 講義	15 (11.3)	56 (42.1)	54 (40.6)	8 ( 6.0)	0	53.4

学生による授業評価

2) グループ討議	23 (17.2)	52 (38.8)	44 (32.8)	3 ( 2.2)	0	56.0
3) クラス発表	18 (13.4)	65 (48.5)	38 (28.4)	10 ( 7.5)	3 ( 2.2)	61.9
4) 全体討議	13 ( 9.8)	41 (30.8)	55 (41.4)	18 (13.5)	6 ( 4.5)	40.6
5) ロールプレイ	43 (32.1)	55 (41.0)	22 (16.4)	10 ( 7.5)	4 ( 3.0)	73.1
6) 実習	37 (28.5)	48 (36.9)	35 (26.9)	7 ( 5.4)	3 ( 2.3)	65.4
7) VTR 視聴	40 (29.9)	55 (41.0)	31 (23.1)	5 ( 3.7)	3 ( 2.2)	70.9
8) ウイクリー	47 (35.1)	59 (44.0)	22 (16.4)	5 ( 3.7)	1 ( 0.7)	79.1
9) 自己学習	6 ( 4.5)	18 (13.4)	59 (44.0)	28 (20.9)	23 (17.2)	17.9

Q 8 次の項目は、この科目の担当者である私が授業の中で達成すべき課題です。それをどの程度達成したと、あなたは評価しますか？

	きわめて 高い	かなり 高い	どちらとも 言えない	かなり 低い	きわめて 低い	達成度
1) 興味・関心の喚起	27 (20.1)	79 (59.0)	25 (18.7)	2 ( 1.5)	1 ( 0.7)	79.1
2) 明解さ	37 (27.6)	68 (50.7)	24 (17.9)	5 ( 3.7)	0	78.3
3) 教科の知識	42 (31.3)	60 (44.8)	32 (23.9)	0	0	76.1
4) 準備	46 (34.3)	52 (38.8)	32 (23.9)	4 ( 3.0)	0	73.1
5) 熱意	48 (35.8)	71 (53.0)	13 ( 9.7)	2 ( 1.5)	0	88.8

6)親しみやすさ	57 (42.5)	61 (45.5)	9 ( 6.7)	5 ( 3.7)	2 (1.5)	88.0
7)援助	20 (14.9)	44 (32.8)	59 (44.0)	9 ( 6.7)	2 (1.5)	47.7
8)他者の見解に対する寛容	18 (13.5)	39 (29.3)	71 (53.4)	5 ( 3.8)	0	42.8

Q 9 ウィクリーについて、以下の各項目ごとに、当てはまる番号を○で囲んでください。

	きわめて そうだ	かなり そうだ	どちらとも 言えない	かなり ちがう	とても ちがう	肯定率
1)自分のコメントが 載るのが楽しかった	44 (45.4)	28 (28.9)	19 (19.6)	5 ( 5.2)	1 ( 1.0)	74.3
2)自分のコメントが 載るのが嫌だった	4 ( 3.0)	17 (12.8)	41 (30.8)	18 (13.5)	53 (39.8)	15.8
3)いつも正直に 本音を書いた	51 (38.1)	39 (29.1)	27 (20.1)	8 ( 6.0)	9 ( 6.7)	67.2
4)他の人の意見を 知れてよかった	75 (56.0)	50 (37.3)	7 ( 5.2)	2 ( 1.5)	0	93.3
5)自分を振り返る チャンスとなった	49 (36.6)	43 (32.1)	38 (28.4)	4 ( 3.0)	0	68.7
6)自分の考えを整理 する参考となった	42 (31.3)	56 (41.8)	33 (24.6)	3 ( 2.2)	0	73.1
7)実名も載せる方が いい	6 ( 4.5)	12 ( 9.0)	66 (49.3)	25 (18.7)	25 (18.7)	13.5
8)コメントへの担任 の意見を載せる	40 (29.9)	61 (45.5)	27 (20.1)	2 ( 1.5)	4 ( 3.0)	75.4
9)多様なコーナーを つくる	24 (17.9)	45 (33.6)	51 (38.1)	11 ( 8.2)	3 ( 2.2)	51.5
10)発行が楽しみ だった	49 (36.6)	43 (32.1)	38 (28.4)	3 ( 2.2)	1 ( 0.7)	68.7

学生による授業評価

11)自分も教師として 実践したい	43 (32.1)	45 (33.6)	39 (29.1)	6 ( 4.5)	1 ( 0.7)	65.7
12)役にたらず時間の 無駄だ	1 ( 0.7)	3 ( 2.2)	15 (11.2)	33 (24.6)	82 (61.2)	2.9
13)後輩のためにも 継続してほしい	76 (56.7)	41 (30.6)	15 (11.2)	1 ( 0.7)	1 ( 0.7)	87.3
14)仲間意識がわいた	27 (20.1)	37 (27.6)	61 (45.5)	4 ( 3.0)	5 ( 3.7)	47.7

Q10 あなたは、この科目を通じて学習しえた程度を評価するならば、どの程度ですか？

	きわめて そうだ	かなり そうだ	どちらとも 言えない	かなり ちがう	とても ちがう	達成度
1)教職への志望意欲が 高まった	35 (26.1)	52 (38.8)	38 (28.4)	9 ( 6.7)	0	64.9
2)教職へに志望意欲が 低下した	1 ( 0.7)	4 ( 3.0)	43 (32.1)	33 (24.6)	53 (39.6)	64.2
3)課題を多く見出した	59 (44.4)	53 (39.8)	19 (14.3)	2 ( 1.5)	0	84.2
4)建て前だけの話だと 思った	3 ( 2.2)	6 ( 4.5)	51 (38.1)	45 (33.6)	29 (21.6)	55.2
5)教職の重要性を痛感 した	83 (61.9)	34 (25.4)	15 (11.2)	2 ( 1.5)	0	87.3

Q11 その他自由に意見を書いてください。

- 1) 記述あり：90 (67.2)
- 2) 記述なし：44 (32.8)

注

- 1) 『一般教育学会誌』第12巻第2号 120頁
- 2) 原 一雄「大学の自己点検・評価」『一般教育学会誌』第13巻第1号 30頁
- 3) 深沢 徹編『オリエント幻想の中の沖縄』海風社 1995年7月
- 4) 村田 全編『学問の中の私』玉川大学出版部 1995年7月
- 5) 「リクルート大学別満足度調査」1993年10月～11月に実施。対象は大学4年生の在籍者数550人以上の232大学の4年生男女9万2800人。回答者50人以上の226大学について集計。集計人数は1万8800人。回答者個人の大学に対する「満足度」、大学別の回答者平均値である「満足値」、226校中の「順位」を算出している。質問項目は大学を総体的にとらえた大項目3, 満足度を構成する10種類の構成要素, より具体的な小項目42の計55項目である。

満足度と満足値の算出方法は各設問に対し満足度を5段階で回答。－2, －1, 0, ＋1, ＋2を配点。数値が高いほど満足度が高い。満足値は各項目の回答平均と分散を計算し, 平均＝50, 標準偏差＝10として換算。

本学学生による回答結果については, 『アンデレクロス67』に紹介されているので参照されたい。
- 6) 文部省編『平成元年度 我が国の文教政策』大蔵省 139頁
- 7) 同上書, 140頁
- 8) W. J. マッキーチ 高橋靖直訳『大学教授法の実際』玉川大学出版部 1984年 309頁
- 9) W. J. マッキーチ 同上書 309頁
- 10) W. J. マッキーチ 同上書 313頁



## Student's Evaluation of Teaching — A Case of Teacher Education —

Rikuo HAYASHI

This report was written to introduce the readers to the methods of teaching and student's evaluation of classworks in the course of study for teaching profession.

In the background of the report is the reform of Japan's university chartering standard, in which self-inspection and self-evaluation in general was set up as one of the targets of teachers' endeavors. Since the present writer covers the subjects in the course of study for teaching profession, he has been directing his attention to the educational activities of teachers, particularly an ideal way of their instructions in education and their contrivance and improvements in teaching method.

Now, what has been strongly required as one of the themes in teacher education is the rearing of so-called 'ability to build the capacity for teaching.' In order for a teacher to attain this 'ability,' a teacher in the future, namely, a student in this course, should be conscious that he or she is a member of a class as its constituent, attend a class as an independent student with clear consciousness of problems in the subject plus strong will to achieve his or her own task, and also strive for the acquisition of basic and vital ability required of him or her as a teacher in the future. Thus, what becomes important to bring about this ideal condition is that classes on the collegiate level should be run and developed by using multifarious teaching methods and make

students experience the process of inspecting and improving the contents and methods of teaching. This is because the very experience will surely provide students with the clue to acquire their own practical method of teaching and self-inspection.

What is shown here are those examples of students' evaluation of classworks, which the present writer made them carry out in their study of the subject he covers. He believes that this attempt has contributed not only to bringing about students' consciousness of problems in classworks but to offering them the data to be used for the readjustment of improvements in their own classworks. The present writer would like to introduce the readers to the outline of this very attempt.